

「目的(夢)と目標を持つことで行動が変わる (自分の可能性を信じて行動しよう)」



植田 辰哉 (うえた たつや)
元全日本男子バレーボール選手・監督

経歴
東かがわ市出身。白鳥中学校を卒業後、大阪商業大学付属高校(現大阪商業大学付属高等学校)、大阪商業大学に進学。大学卒業後、新日本製鐵(現日本製鐵)に入社。日本リーグ(現Vリーグ)ではミドルブロッカーとして、新人賞、ベスト6(5年連続)、ブロンズ賞、スパイク賞など数々のタイトルを獲得。日本代表としても活躍し、1992年のバルセロナオリンピックには主将として出場、6位入賞に大きく貢献した。現役引退後は、新日本製鐵、日本代表ジュニアチームの監督を歴任し、2005年に日本代表監督に就任。2008年北京オリンピックでは、16年ぶりに日本代表をオリンピック出場に導いた。現在は大阪商業大学で公共学部公共学科教授を務める。

夢が目標に変わった少年期

私の結婚式で、白鳥中学で私の担任をしていただいた谷川先生が当時私の書いた作文を読んでくださいました。そこには、「僕は将来オリンピック選手になる」と書かれていました。どのような心境で書いたかは覚えていませんが、夢を持ったことがその後の自分の行動を変えたのだと思います。

私の人生の分岐点の最初は、中学3年生の春でした。春の高校バレー決勝戦、大阪商業大学付属高校(現大阪商業大学付属高等学校)対藤沢商業高校をテレビで観た私は、大阪商業大学付属高校(以下大商大付属高校)の迫力あるプレーに感動し、バレーボールをするなら大商大付属高校でやりたいと強く思いました。

当時の大商大付属高校の実力は、全国トップレベルにあり、今考えれば、私(当時172cm)が挑戦するには無謀ともいえる挑戦でした。私は一般人入試で受験、合格し進学したものの、レベルの差は歴然で、ボールを触らせてもらえない日々が続き、毎日ランニングやトレーニングが中心で、技術練習はほとんど行わなかったと記憶しています。

しかし、私の身長は急激に伸びはじめ、1年生の後半までに190cmを超し、2年生の春には195cmに到達しました。身長が伸びたことで監督の上野先生の目に留まり、いきなりレギュラーに抜擢されることとなり、私のアスリート人生はスタートしたのです。上野先生との出会いが私の人生を変えたといっても過言ではありません。

運命的な出会いをした高校時代

高校時代に全国大会で準優勝(3年生のインターハイ)を果たすなど、様々な大会で成績を残しました。3年生時には、全日本高校選抜チームに選出され、横浜で行われた国際大会に出場しました。その際にコインランドリーで洗濯をしていた時に偶然出会った女子学生の中に、今の妻がおり、バレーボールがきっかけで出会った出会いであったと懐かしく思います。

人生を大きく変えた大阪商業大学での学び

高校卒業後、大阪商業大学に進学し、バレーボール漬けの毎日を送りました。当時は連帯責任が当たり前で、同級生が何かミスすれば全員が責任を負わなければならない、1年生時は地獄の毎日でした。高校と違い、練習は4年生が考え、責任をもって進めており、下級生は常に緊張していました。

現在では、上級生、下級生の立場は昔ほど厳しいものではないように感じますが、私は大学時代に上下関係の厳しさや各学年での責任というものを学びました。チームの結果が出ないときは、4年生が監督から強く叱られました。3年生は気楽な立場でしたが、次は自分たちの時代が来るといった危機感もあったと思います。2年生は1年生の雑用から解放されますが、新1年生の教育担当として重要な役割がありました。

私は大阪商業大学でたくさんの方の指導を受けました。大阪商業大学の建学の理念である「世に役立つ人物の養成」は私が所属したバレーボール部の先輩後輩は社会に出てからも実践しており、スポーツ界に限らず様々な分野で活躍しています。

信頼を勝ち取るためにがむしゃらに練習した青年期

大学卒業後、新日本製鐵(現日本製鐵)に入社し、バレーボール部(現堺ブレイザーズ)で36歳まで現役を続けました。その間日本リーグ3連覇をはじめ、多くのタイトルを獲得しました。そして、26歳の時に高校3年生の時、横浜で偶然出会った女性と結婚し、翌年の1992年のバルセロナオリンピックに主将として出場(6位入賞)。この年に長男が誕生しました。大学卒業後の4年間(23歳~27歳)は私にとって公私ともに大きく飛躍できた時期でした。

指導者としての挑戦

1992年のバルセロナオリンピック以降、日本の男子バレーボールは3大会連続でオリンピック出場を逃すなど厳しい状況でした。2005年に日本代表監督に就任した私は、フィジカルトレーニングによる体力強化を中心に、食育(日本代表としては初めて栄養士の登用)の徹底や、プランニングの共有など様々な改革を実施し、2008年の北京オリンピックに16年ぶりの出場を果たしました。

アジア最終予選では、初戦のイタリア戦にフルセットで敗戦した日から、食欲が落ち、予選期間中は精神的、肉体的にも限界でした。五輪出場を決めたアルゼンチン戦に勝利した瞬間にコートに倒れこんでしまい、当時大きな話題になりましたが、私の持っている力の全てを使い果たし、倒れてしまったのだと思います。

アジア最終予選での勝利は私の人生の大きな分岐点となりました。試合終了後、キャプテンの荻野君と抱き合い男泣きしたこと、選手達から祝福の胴上げをされたことは、一生の思い出です。



アジア最終予選での胴上げ

自分の可能性を求めて

その後、2012年に代表監督を辞任し、2015年までは普及活動に努めましたが、社会性を学ぶためにバレーボール界を離れることを決意し、新日本製鐵(現日本製鐵)大阪支社で2015年から2018年の3年間営業実務を経験しました。2018年3月末、自分の可能性を更に広げる為に新日本製鐵を退社、早稲田大学大学院に入学し修士を取得しました。大学院では、ブラジルの強化策を研究しました。現在、日本における指導者育成は最重要課題であり、指導資格取得制度など、優秀な人材育成に向けた指針を明確にすることが必要と考えています。

私は、これまで様々な挑戦をしましたが、何事も目的と目標を持ち行動につなげることが重要であると考えています。皆さんには、自分の可能性を信じ目的と目標を明確にし、頑張ってくださいと思います。